

[特集：子どもの学校生活から垣間見える家族]

保健室から見える子どもとその家族の支援

水戸市立赤塚小学校養護教諭

中川裕子

1 はじめに

子どもたちは保健室に、怪我や病気の手当て、付き添い、相談、委員会活動や清掃、そしてなんとなく話をしにきたり遊びにきたりと、さまざまな理由で来室する。

訪れる目の前の子どもたち一人ひとりに関わっていて、生活リズムや身体症状、心の状態、あるいは友人・親子の対人関係などの変化に気づく。これまでより、家族の状況や症状の背景など個人の状態を考慮し対応することが必要になってきた。

本稿は、保健室での子どもの支援を通して見える親子関係を例示し、援助の方向を考える資料を提供してみたい。

2 保健室から垣間見える親子関係

(1) 見捨てないで

まわりの友達が注意されていても自分が怒られたと感じて萎縮してしまう子、緊張や不安感で常におどおどし、トイレに行くにも許可や確認をとってから行動する高学年の子、あるいは、いつも良い成績とることを表明し自由時間もないほど頑張り続け、疲れている子どもがいる。このような、体に症状が出たり不安で学級に適応できなくなった子どもたちに保健室は関わるが多い。

その背景に過保護・過干渉の保護者の支配にがんじがらめになり、「よい子」で適応している子どもの姿が見える。元気なタイプの親が多く、弱音が吐けない子どもは、小学生のうちはそれでも頑張れるが、思

春期に入り息切れがして不登校や問題行動で意思表示をするようになることも多い。

反対に、食べることも満足に面倒を見てもらえず、子どもだけで置いておかれる放任の家庭の子どもがいる。落ち着かず勉強どころでなかったり、友達と関係が作れなかったり、イライラしている姿は、筆者には、「淋しい」という叫びとなって聞こえてくる。過干渉と放任、どちらにしても子ども達は、見捨てられまいと親に必死でしがみついている。とても健気に。

(2) おとなのように

子どもから親の借金や夫婦喧嘩、親戚や職場のトラブル、近所付き合いのこと、うまくいっていない祖父母との軋轢などの相談を受けることがある。親が困っていることをすべて子どもに聞かせているのである。子どもは自分がなんとかしなければと真剣に考えており、学校どころではない。そのような親の問題を大人のようにして対処する自分に満足気な様子を示す子どももいる。そして、同世代の子どもたちとは関わらないでいる。

(3) 遠慮

朝、職員昇降口で担任や養護教諭の出勤を待つ子どもがいる。前日の夜から具合が悪くて眠れなかった子、朝になって解熱したので登校したが気分が悪くなった子、朝食も食べられないくらい気分が悪かったが登校した子などである。必死で登校して必死で訴える。よく話を聞くと、親には話していないことが多い。「お母さん仕事だから」、「忙しそうだから」と言う。迷惑をかけたくなかったとも言う。親に遠慮している。たとえ親に話したとしても、「何も言ってくれなかった」、「何もしてくれなかった」、からだに触っても、熱をはかってもくれなかったと言

うのである。

親は普段の様子から大丈夫と思ったのか、自分の出勤の都合で焦ったのか、頑張つて欲しかったのか解らないが、親の考えや思いは子どもには伝わっていない。具合が悪くなったらどうするかそのような話し合いもしていないため、子どもの方では不安をつのらせているのである。中には、頑張るように言われて、一度は登校して頑張りを見せなければならない子どももいる。

(4) 情と知のずれ違い

「昨日家族で動物園に行った」など休日の様子を話にくる。その時、父親は車の中で寝ていたとか、母親は別なことをして一人で遊んでいたと言う。遊びに連れては行くが一緒には遊んでいない様子だ。集団に馴染めず相談に来室する親子のやりとりを見ていると同じように、一緒に楽しんでいないことがある。子どもは、見てて！！、楽しい、おもしろい、失敗しちゃった残念！などさまざまな感情を表現している。この感情の言葉に感情の言葉で返していないことが目立つ。すぐに技術的なことを教えたり、なぜ、どうしてと知的で反応してしまう。その結果子どもの方はだんだん感情を押しさえ、元気をなくしている姿に変わる。

対人関係でつまづいている子どもと接していて、感情を出せるようになると関係に変化が訪れるのを体験するにつけ、低学年時代の情的な関わりの大切さを痛感している。子どもが知的な整理や方向づけが必要な年齢になった段階で知的な関わりが求められるのだと思う。

3 親の苦悩

(1) 防衛

最近保護者から頭ごなしにガツンといわれることが増えた。保健室で怪我の手当てをし早退や受診のために保護者の来校を依頼した時、「なんで、怪我をさせる！！」と怒っている。状態や怪我の状況、変化の目安や子どもの頑張りぶりなどを伝えたいが取り

つく島がない。

喧嘩での怪我だともう一回、「悪いのはうちの子だけですか！」と逆切れすることも。「家ではいい子です」と学校に問題があると主張したい様子が見て取れる。別に批判的に言っているつもりはないが、指摘されたと感じているように見える。何回か関わりを続け関係ができると、保護者も子育てに自信がなく迷っている様子も伝わってくる。大抵近所や親戚などから孤立している様子があり、親も弱音や本音が吐けないでいる。親も苦悩している。

(2) 多忙

怪我や病気でお迎えの時、親が子どもの近くに寄つておでこに触つたり、体をさすつたりする光景も少なくなってきた。面倒を見られた体験がないためにケアできないということも耳にするので、この時とばかり対応を実演し子どもに触つてアピールするが乗ってもらえない。遠慮もあるのかと思い、傷口を解いて見せて、「ここが…」と近付けるようにも試みるが、車のエンジンをかけたままだから、診察券を出してきたからと、保健室の入り口から声をかけ急がせる。忙しいのである。勤めているいないに係わらず多忙である。どこがどんなふうに辛くて、どんなにか心細くて、何をしたら楽になって…上手に体の状態を説明できたことも伝えたいのに、あるいはシビアに朝食欠食や夜更かしのことも話さなければと思つていても、何も伝えられない。折角の学びのチャンスなのに何も学びにならなくて、子ども抜きに病院だ謝罪だで終わつてしまいたいと感じている。

(3) 自信

「どうしたら良いでしょう」具体的な方法をいきなり質問されることがある。こうしたいと思いますがという前置きはない。朝、登校させるか病院どちらが良いか電話で相談されることもある。その場がしのげれば良いように感じさせられるときもあるが、子どもの病気や怪我の手当てや心のゆれに直面したとき、自分の対応に自信がないので、決めてもらいたいし、責任を共有してもらいたい様子もうかがえる。親

自身の生活体験が不足した時代に育った世代になり、まわりにそれをフォローする仕組みもなくなり、頼りは病院の専門家ということになってしまうようだ。自信のなさ、氾濫する情報に翻弄され、何が大事だか見失いさらに不安を増幅させる状況もおきている。

この自信のなさは子どもたちにも関係し、寝たら治ったとか、温めたら楽になったとか自分の生活を変えてみての変化を実感するチャンスも奪っている。

子どもたちは、保健指導の積み重ねで、もともと持っている自分の力を発揮できるように何が大切かを学んで知識としては身につけていくが、生きて働く知恵にするには日々の生活の中での実践が必要と感じている。

(4) 自分の問題を抱えて

子どものことで関係ができた母親から、自分が虐待を受けたこと、親に面倒を見てもらえず親戚を回ったこと、中には「わたしはAC」とはつきり言われることもある。親が育ちの中のまだ整理できないものを抱えて苦悩していることがある。学校の教員が聞き役になることも多いが、持っているものが大きく軽率には受けられない。しかし、子どもが大切にされていることを実感したり、母親の頑張りを支えると、関わり方に余裕が出てくることもある。

4 A男親子の関わりから学んだこと

学校生活を過ごす上で子どもの問題を解決するために、養護教諭として保護者に関わることが多い。その中の一人のA男の母親との関わりからは、多くの学びがあったのでそのことを紹介したい。

A男が6年生になったときの夏のこと、A男の母親から「先生、うちの地域の花壇を見に来てくださいよ。見事です」と声がかかった。

前年まで雑草が生い茂っていたその花壇は実にきれいだった。下の子の年齢を考えるとこの地域にあと10年世話になるという。その地域には潤いが欲し

いという。子どもたちも土を掘り起こし苗を植え、水やりもよくやつたと喜んでた。わが子のことのみでなく地域のことまで考えている母親の姿がそこにあった。

A男に花壇を見にいったことを告げると、「ぼくちのお母さん お花大好きなんだ」と満足な表情だった。母親もA男もやつと自分らしさを発揮できる時期がやってきた。このA男と母親に関わった経緯とそこから学んだことは次の通りである。

(1) 関わり の概略

< A男のこと >

A男は小学3年生の時に、両親の離婚により、母子4人の新たな生活を始めるために、筆者の勤務する学校に転校してきた子どもである。転校前の学校からは、いわゆる多動児で、教室には居られず学校長が対応していたという引継ぎを受けていた。

転校してきたA男は粗暴な行為が目立ち、キレると彫刻刀などを振り回し、相手の急所を狙うので、教師の目が離せなかった。授業が中断することが多くなるにつれ、学級からA男を排除しようとする気配も出てきた。

校内で話し合いをし支援計画を立てたが、堪忍袋の緒が何度も切れ膠着状態が続いた。学校の手には負えないと判断し、専門機関に繋ごうとしたが、母親から断られて果たせなかった。学校と家庭が、互いに原因や責任を擦り付けていた。

< 養護教諭のA男への対応 >

筆者が家庭訪問をすると、ちょうど、腕まくりをしてお米を研ぎ、妹に振りかけご飯を食べさせようとしているA男の姿を見ることができた。この時A男は、かつて自分が父親から暴力を受け恐かった話など家の話をしてくれた。

保健室でA男と関わるが多くなった段階で、A男の中に「乱暴しない子になりたい」という欲求を感じ取った。そこで、養護教諭は手作りの「お守り」を用意し「給食をよく食べる、休み時間は外で遊ぶ、学校を休まない」という約束を交わした。これらの内容はその時点でできることばかりをあてたものであ

る。A男が失敗を繰り返していても「見捨てないよ」、「あなたが好き」というメッセージを伝えるよう心掛けた。

〈担任と保護者の関わり〉

4年の担任は、A男とは別個に保護者(母親)との関係を築き上げていた。例えば、「お母さん、(A男は)良くなっているよ、頑張ったね」というように、A男の小さな変化や良かったことを伝えるようにしていた。そのうち、母親から「明日の用意や宿題」の問い合わせがあるようになり、家庭でA男に関心が向けられ、一緒に行動している様子が伝わってきた。母親は夜の仕事から日中の仕事に変えていた。

〈担任とA男の関わり〉

A男は、5年生の男子の担任の先生をととても慕った。駄目な行為には厳しい指導が入ったが、担任は声掛けを頻繁に行ない、できる役割を与え、存在感や成功感を味わえるように配慮した。

〈A男の変化〉

A男は放課後、友達と遊ぶ時間が増え、学級の中にも溶け込めるようになり、危険行為も減っていった。時折見せるパニックの時に、養護教諭は関わりを続けた。この時のA男は、落ち着くまでの時間が短くなり、自分がしていることを見ることができるようになり、いやだったことや悔しかったことなどの感情を言葉に出せるようにもなった。卒業する頃は、まだ衝動性や幼児性は残っていたものの、学習の遅れが目立ち、本人も辛い思いを抱えていても、学級で友達といることが楽しくなっていた。その頃A男のランドセルからあのお守りが消えていた。

〈養護教諭の母親との関わり〉

母親はA男が保健室を利用することに対して、それまでは「養護教諭に甘えている」と批判的だったが、「(養護の)先生には甘えられるんですね」と変化した。この頃、母親から専門機関の紹介の依頼があったので紹介した。A男も一緒に出掛けていたが、相談員との関係もよく主に母親の面接が継続し、母親自身の育ちの問題を整理できたと、養護教諭に話してくれた。

6年の頃には母親といい関係で同じ願いで同じ高さで対応していると実感が持てた。ある時、A男がテレビゲームにはまり睡眠不足で起きられず甘えていたので、母親はA男が腹痛を訴えても無理に学校に行かせたことがあった。その時も母親は「必ずA男は保健室に寄つただろうと思ったから」と保健室を訪れ、母親は最近の様子や母親の考えを話してくれた。朝、保健室の前をランドセルを背負いウロウロしていたA男の話聞いた後、教室へ一緒に出かけて担任に引継ぎ、保健室に戻った時のできごとだった。母親の思いがA男にもしつかり伝わっていることを伝えられた。その後もA男が時々妹への嫉妬や学習でのつまづきで退行した場合でも、仲間のような息があつた感じで関わるができるようになった。

〈母親の変化〉

卒業の頃に、「お母さん、よく頑張ったね」と伝えようと、4年間を振り返りこんな話をしてくれた。4年の時までは、大人と同じことをやらせることが、しつかりさせることだと思っていた。自分もそうして家を切り盛りして大人になった。でも、やらせれば突っぱねればそうするほど駄目になっていくわが子を見て、これではいけないと方針を変え、一緒にやることに切り替えたという。仕事も変えての一大決心だったという。「今大事にやらなくていつ」と思ったという。その中で変化するA男に励まされ自信もつたという。

(2) A男の事例から学んだこと

①関心を寄せ続けることの意味

専門機関でも発達的な障害を指摘されなかつたA男の問題行動は、現在の落ち着きから推察しても、情緒の不安定さが苦しみとして表現されず、行動で表現されたものだったと思われる。関わってほしい、存在を認めてほしいという言葉にならない叫びだったのであろう。人格を否定せず関わり続けたことでその声を聞くことができたのだと思う。どんな状況でも関心を寄せることが基本であることを教えられた。

②仲間になるということ

A男の情緒は、まず、養護教諭や担任との関係ができ、学校生活の中で安定するときがあつて安定し始めた。この小さな学校での変化は、母親が危機感を持ち、対応を切り替えた時期と一致し、母親の対応の自信につながつたと捉えられる。「親が変わらない」と言うのは学校側の言い訳であると学んだ。また、母親の体当たりの関わりによって、A男が家庭の中で安定したからこそ学級で活動ができるようになったことは言うまでもない。

転校当初、母親は学校からの連絡に激怒し、明け方勤めから帰ると寝ているA男を起こし説教したという。これも、今になれば、新しい生活で福祉の援助も断りなんとか頑張ろうとしていた母親の行き場のない焦りだったのだと思える。学校は現象のみを捉え、母親の教育力を責めた。孤立していた母親は、学校の対応に批判的になることでしか自分を支えられなかったのだろう。この離反した時期がもう少し短くなるよう、当時もつと母親の思いをじっくり聞く人が必要だったと反省している。

A男の小さな変化が母親に余裕を作り、母親がもともと持っていたA男をしっかり大人にしたいという思いは、A男に必要な対応を焦点化することができた。関わる人々とのさらなる安定の中で、母親は持ち前の力を発揮したと捉えている。この母親の思いは学校でも同じであることが、互いに理解されることが大事である。これにも時間がかかったが、焦っても仕方なく、その時その時の関わる人との出会いの中に用意されていたと思う。その時その時の関わる人でできることを考えることの大事さを学び、その丁寧さが次の出会いを作ってくれるのだと思つた。

③関わりの中で育つ子ども

A男と長く関わる中で、家庭がどのような状況になり自分の立場がどのように危うくても、大人の対応に傷ついても、見捨てられまいと頑張る子どもの姿が見て取れた。そんな子どもの健気さを実感し、いとおしく思うようになった。また、A男の変化を見る

と、丁寧に関わつたことで、人はその関係の中で育ち生きていくのだということも実感できたと思う。高学年になると学級の中には寛大にA男に関わり続けてくれる友達もできた。友達とのやりとりが体験できた5年生の学級の存在は大きかった。最初は保護してくれる大人との関わりの中であつたが、その後はまさに集団の関わりの中で癒され成長したと思える。

④子どもに育てられる大人

A男の情緒の不安定さは、親が抱えている自分の問題への動揺でもあつたと思う。A男の心が安定し、学級で活動できるようになり、次いで学校生活が営めるようになったというように、自分が受け入れられ安定し、少しずつ外に向かつて関係の幅を広げていくプロセスは、保護者、学校で関わる人々の安定のプロセスと同じであつたと感じている。

⑤長い目で見ること、見る人の存在

学校の人的環境も毎年変化する。現に担任も毎年変わつたが、4年間養護教諭は継続して関わることができ、変わる担任とA男と母親をコーディネートできたことも、A男はもちろんのこと関わる人すべての人の安定に役立った。長い目で見るところと日々教育の手を入れるところとは試行錯誤はしたが一致して関わることができたと思う。

⑥A男を支えた家族

A男の母親は、荒削りの感があつたが、自分の頭で考え、やってみては感じ、A男に体当たりしていた感がする。当初考えや方向には、無理なところがあつたが、自分のこどもの様子をじつと見て、今までのやり方考え方に危機感を持ち、方向を変えられた柔軟さがあつた。最後の砦は自分という、いい意味での気迫がいつもあつた。

母親が日中の仕事になり、A男はきちんと食事もし睡眠もたつぷりとれ、体も安定した。決まった時刻に登校し、友達とも遊び、生活にリズムが刻めるようになった。

家に帰れば、今までどおり、妹や弟の面倒も家のことも家族の役割としてきちんと達成させる厳しさが

あり、A男と一緒に過ごす時間も大事にした。そんな中でやさしいA男は妹や弟を連れてよく外でも遊ばせていた。

転校当時、学校の対応に批判的だった母親も、わが子の起こした問題を相手の友達のせいにはしなかった。失敗した時はA男を伴い、一緒に頭を下げて、悪いことをしたなという思いをA男に感じさせていた。

母親は、筆者よりずっと若いにもかかわらず大人を感じさせる人であったが、その大人っぽさは、自分できちんと問題を引き受けているとう自立した大人のせいだったかもしれないと、今になって感じている。

5 おわりに

保護者も教職員もだれも子どもをよく(大人に)し

たいと思つて関わっているが、ボタンを掛け違ふことがある。大人が、子どもを取り巻く仲間として関心を寄せあい、それぞれの立場や背景に思いを馳せながら、その時出会った人々が、方針を以て自分にできることを見極め、丁寧に関わるのがやはり基本だと思つている。チームでの対応が望まれるが、関わる大人がもっと仲良くなるのが援助関係を支えると感じている。

(A男の事例は、プライバシー保護のため、主旨が変わらない範囲で一部修正をしています。)